

国立国語研究所学術情報リポジトリ

喜界島方言の系統的 위치について

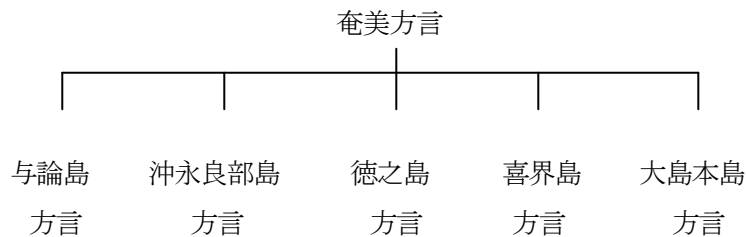
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002431

喜界島方言の系統的位置について

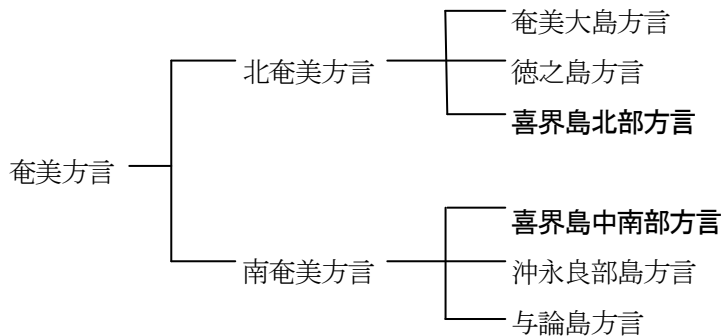
ローレンス・ウエイン

1 はじめに

仲宗根 (1961: 20-1) や 外間 (1977: 295; 2000: 325) は奄美群島の方言を次のように分類している。



この分類が正しいとすれば、奄美祖語から比較的短期間 (数世代か) のうちに下位の五方言群がすべて出来上がったことになる。一方、中本 (1981b: 26) は奄美方言群はまず北奄美方言と南奄美方言とに分岐し、その後さらにいくつかの下位方言群に分かれたとするが、現在の喜界島諸方言の一部は北奄美方言系で、残りのものは南奄美方言系として分類している。



この分類に拠れば、喜界島の北部方言と同じ喜界島の中南部方言の関係より、喜界島北部方言と徳之島の方言の関係が近いということになる。また、喜界島の北部方言と中南部方言の両方にある語形は、借用形でないとすれば、奄美祖語に再建されうる。すなわち、喜界島北部方言と喜界島中南部方言の最近共通祖語は奄美祖語になる。この区分けは最近では木部 (2004: 9,10) やかごしま地域文化創造事業奄美地区実行委員会 (編) (2010: 7,8) も踏襲している。

狩俣 (1999: 40, 45) は中本 (1981b: 26) 等の南奄美方言群に沖縄北部方言を加えて、「沖永良部与論沖縄北部諸方言」という方言区画を設けた上で、喜界島北部方言である「小野津、志戸桶、佐手久のみつつの

集落の方言も他の喜界島の諸方言と同様にこの下位グループにふくめるべきであろう」(45 頁) と述べている。

本稿では、中本 (1981b: 26) 等と対立する立場をとって、喜界島北部方言と喜界島中南部方言はともに一つの方言区画を形成することを論じる。

2 喜界島方言にみられる改新形¹

ローレンス (2006) には次の件がある。

「伝統的な区画でいう奄美方言が一つの方言群を構成するかどうかという問題は本稿の範囲外であるが、一つ示唆的な語は「顎」を意味する語形である。沖縄ではこれは*kakuzu 系になっている。八重山も同系統のようである (石垣 kakuzi, 波照間 hakoci, 与那国 kagudi) から、沖縄からの借用語でないとすれば、琉球祖語に*kakuzu が再建される。しかし奄美大島・徳之島・沖永良部・与論の諸方言の語形はすべて*kakazu に遡るようである (名瀬 kaazi, 住用村市 kahazi, 瀬戸内町嘉徳 k^hahat, 徳之島亀津 kaazi, 沖永良部和泊 kaazi, 与論 kaazi)。このことは奄美地方の方言は一つの系統的まとまりをなすことを示す根拠となろう。」(115 頁注 4)

喜界島方言では*kakazu 系の語形は「顎」の意味で使われないが、*kakazu に対応する語形として次のものがある。

小野津	k ^h aazu	「口」(卑語)
志戸桶	k ^h aazu	「口」(卑語)
塩 道	k ^h aaduccju	「口やかましい人」
坂 嶺	k ^h aazu	「余計なことをしゃべること」
阿 伝	k ^h aadu	「口」(卑語)(岩倉 1977[1941]: 67)
城 久	k ^h aazuu	「しゃべりすぎる人」
湾	k ^h aadu	「おしゃべりのしすぎ」(けなして言う)
中 里	k ^h aazuu	「悪口を言うこと」
上嘉鉄	k ^h aadu	「おしゃべりが多い」

喜界島のすべての方言は別系統の単語を「顎」の意で使うだけでなく、今回調査したすべての地点では*kakazu 系の単語は卑語的な意味合いをおびて意味推移を起こしている。他語形の「顎」の意味領域への

¹ 本稿では簡易音声表記を使用する (tu=[tu], ti=[ti], si=[ci], sj=[c], ca=[tsa], cja=[tɕa], aa=[aː])。

侵蝕がこの意味推移を引起したか、あるいは *kakazu 系の単語が意味推移をおこして、穴を埋めるために別の語形が「顎」をさすようになったと推察される。しかし、全島的に同じ卑語的な方向に意味推移しているのは、意味がその方向に変化したのは一回だけであって、変化しはじめてのちに各々の方言に分化していったであろうと推測される。

次の語形が示すように、「みかん」の奄美祖語形は *kunebo として再建できる — 笠利町佐仁 k'unugu (琉球方言研究クラブ 2003: 233; 狩俣 2003: 43), 旧名瀬市街 k'unigu ~ k'unibu (寺師 1958:11), 大和浜 k'unibu (長田・須山 1977: 808), 瀬戸内町諸鈍 kuniibu (Serafim 1984: 100), 徳之島浅間 k'unin (岡村ほか 2006: 27), 沖永良部知名町瀬利覚 kurubu (日本放送協会 1972: 163), 沖永良部和泊町皆川 kuribu (上野 2005b: 174), 与論麦屋東 kunibu (菊・高橋 2005: 189)。一方、喜界島の方言では語末母音は aa になっている。

小野津 k'uniΦaa
志戸桶 k'uniΦaa
塩 道 k'unip^haa
坂 嶺 k'unip^haa
阿 伝 k'uriΦaa (岩倉 1977[1941]: 89)
城 久 k'urihaa
赤 連 k'uriΦaa
湾 k'urihaa
中 里 k'unibaa
荒 木 k'uribaa
上嘉鉄 k'unihaa

琉球方言で「みかん」の語末母音が a(a) としてあらわれるのは喜界島だけのようである。また、喜界島の全地点の語形が -aa で終わっていることから、喜界島祖語形が *kunipaa として再建できる。中本 (1981b) の方言区画に従えば、*kune^paa は *kunebo とともに奄美祖語形として再建され、aa-終わりの語形がなぜ喜界島にしか存在しないかは謎として残る。

奄美の一部の方言では「貝」のことをいうのに カイ系の語形を使う — 徳之島亀津 kai (平山 1986: 160), 沖永良部知名町 kai「総称、二枚貝」(平山 1986: 159), 沖永良部和泊町和泊 hai「夜光貝」(甲 1987: 154), 与論麦屋東 hai「シャゴウ (シャコガイ科の貝)」(菊・高橋 2005: 412)²。喜界島は カイ はなくて、*kai に -a(a) が付いた k'ajaa が小野津, 志戸桶, 伊実久, 坂嶺, 阿伝, 城久, 川嶺, 上嘉鉄などから報告されている (上野

² 柴田 (1984: 178-9) は大和浜の -go もこのカイ系の語形であると論じている。*kawi から語末母音が脱落したものでしょうか。

1992: 81)。全地点ではないが、喜界島の北部方言からも中南部方言からも報告されていることから、*k^hajaa* は喜界島祖語に遡るといえよう。阿伝の方言に *k^heejusi* 「旧暦三月頃の波荒れ (< 貝寄せ)」(岩倉 1977[1941]: 77) があることから、*-aa* が接尾する以前の **kai* が複合語の中に化石化して残っていることがわかる。

奄美群島の各地で「頭」を意味する語形として ツブル系のものが使われている — 龍郷町円 *c^hiburu* (琉大方言研究クラブ 1977: 40), 龍郷町瀬溜 *ciburu* (狩俣・上村 2003: 13), 旧名瀬市街 *ciburu* (寺師 1958: 19), 宇検村湯湾 *ciburu* (中本 1976: 11), 宇検村屋鈍 *t^hibur* (崎村 2006: 130), 徳之島尾母 *ciburu* 「かぼちゃ、夕顔、頭」(徳富 1975: 80), 沖永良部和泊町皆川 *ciburu* 「頭(人のも)」(上野 2006: 12), 与論麦屋東 *ciburu* 「頭、頭脳」(菊・高橋 2005: 316)。喜界島方言では「頭」は *hamaci* というが、喜界島小野津 *t^huburu* 「頭」(崎村 2006: 121), 塩道 *cjuburu* 「頭(古)」, 阿伝 *t^huburu* 「頭(卑)」(服部 1959[1932]: 330) は旧形の残存とみなせる³。

「頭」を意味する別の語形との意味衝突を回避するために、ツブル はいくつかの地点で意味推移を起こして「頭の骨」をさすようになったと考えられる — 大和浜 *ciburu* 「しゃれこうべ」(長田・須山 1977: 125), 徳之島浅間 *cibuuru* 「かぼちゃ、しゃれこうべ」(上野 1977: 14)。喜界島では「頭蓋骨」をさす単語にツブル系の単語があるが、語末に *-aa* があるのは喜界島方言独特の特徴のようである。

志戸桶	<i>cuburaa</i>	「頭蓋骨」
坂 嶺	<i>cuburaa</i>	「頭蓋骨」
阿 伝	<i>t^huburaa</i>	「頭蓋骨」
湾	<i>t^huburaa</i>	「頭蓋骨」
中 里	<i>t^huburaa</i>	「頭蓋骨」

このツブル>ツブラーの *-a(a)* の接辞化と「頭」>「頭蓋骨」の意味推移は同時に起こった変化であろう。この二つの変化が同時におこる必然性はない(*-aa* は「骨」の意味はなく、また大和浜などで *-aa* のないツブル系の語形が「頭蓋骨」をさすようになった) ことから、喜界島の北部方言にも中南部方言にもこの二つの変化がおこっているということは、この二つの変化は喜界島祖語の段階でおこったからであると言える。

「畳む」は奄美地方の各地で *takub-*系の動詞になっている — 笠利町佐仁 *takubjun*, 旧名瀬市街 *takumjun* ~ *takubjun* (寺師 1958: 41), 大和浜 *t^hakuburi* (長田・須山 1977: 259), 宇検村湯湾 *takubjui* (中本 1976: 59), 沖永良部

³ 中本(1981b: 42)は、奄美大島と喜界島でカマチ系の単語が「頭」を表すようになったころ、ツブル系は沖縄を中心に広まったとみているが、喜界島ではツブルは「頭」をさす古い語形であると思われる。

和泊町皆川 takubin (上野 2006: 4), 与論麦屋東 takubjun (菊・高橋 2005: 283)⁴。喜界島方言も takub-系ではあるが、いくつかの地点で -kub- が -bb- か -nb- に変化している。

小野津 tabbi
志戸桶 tabbjun (中本 1978: 53)
阿 伝 taccjui (岩倉 1977[1941]: 142)
城 久 tanbin
中 里 takubi
上嘉鉄 tanbjui (岩倉 1977[1941]: 142)

喜界島の tabb- と tanb- はともに *tabb- という形に遡ると考えられ、喜界島最北の集落である小野津と最南の集落である上嘉鉄、そして中部の海岸から離れた城久集落にも分布していることから、これは喜界島祖語形であるといえよう⁵。この *tabb- はさらに奄美祖語形の *takub- に由来する⁶。

以上に取り上げた語彙項目は喜界島にしかみられない改新形である。次の例も改新形であるが、喜界島独特のものではない。

「下駄」のことを奄美の方言では次のように表現する — 名瀬市芦花部 ?asizja (上野 1996b: 58), 大和浜 ?asizja (長田・須山 1977: 250), 宇検村湯湾 ?asigja (中本 1976: 32), 瀬戸内町諸鈍 ?asizjaha (狩俣 1996: 37), 徳之島亀津 ?anzja (平山 1986: 269), 沖永良部和泊町皆川 ?asizja(a) (上野 2005a: 11), 与論麦屋東 asizja (菊・高橋 2005: 24)。上掲の語形はみな *asizja (< *asidja < *asida 「足駄」) に遡る。一方、喜界島方言の語形には -zj- の形跡が見当たらない。

小野津 ?assaa
志戸桶 ?assaa
塩 道 ?assjaa
坂 嶺 ?assaa
阿 伝 ?assaa
赤 連 ?assa(a)
湾 ?assa

⁴ 徳之島で「畳む」は別系統の tagur- である — 亀津 tagurui (平山 1986: 436), 浅間 tagujun (上野 1977: 22), 井之川 taguri (中本 1979: 62)。鳥島の takuri (中本 1981a: 47) もこの系統であろう。

⁵ 中里と阿伝の語形は問題として残る。阿伝の taccjui は *takk- < *takub- に由来するだろう。喜界島祖語に *takub- と *tabb- の両形式が共存していたのであろうか。

⁶ この -bb- / -nb- の分布と類似のものは「油」 ?abba / ?anba にもみられる (上野 1992: 137 参照)。

中 里 ʔassa

荒 木 ʔassa

上嘉鉄 ʔassa

喜界島方言の ʔass(j)a(a) は *asira に由来すると思われる。この *asira は *asizja からではなく、むしろ古形である *asida から、d>r の変化を経てできた語形であろう。

笠利町東部の平方言にも ʔassja が使われ、同じ笠利町の北部(佐仁集落、笠利集落)に ʔasira が報告されている(上野 1996a: 249)。喜界島の ʔass(j)a(a) は笠利町の ʔasira / ʔassja と関係があるとすれば、喜界島祖語は現在の笠利町東部(喜界島の対岸)にそのルーツがあり、笠利祖語と姉妹語関係にあるという可能性も考えられる⁷。しかし、「下駄」が人工物である故、笠利町東部からモノとともに ʔassja、あるいは ʔasira という語形が喜界島に入って広まったという蓋然性はなくはない。

3 結語

言語(方言)の分岐分類を論じる際、唯一使える手立ては共有される言語改新であるから、その改新が別系統の言語(方言)に散見するほど珍しくないものとなれば、所属の決め手としての効力は著しく減滅する。このため、琉球方言の各下位方言群に見られる p>Φ>h, k>h, B系列音調とC系列音調の合流などの言語変化は喜界島方言が一つの系統群(単系統群)を形成するか、多系統群になるか、その解決には寄与しない。

一方、本稿でみた喜界島の北部方言と中南部方言が共有する改新は一回性の高いものであると思われる。他の琉球方言では -aa は「みかん」、「貝」、「頭」を意味する語形に接尾しないし、takub- は tabb- / tanb- にならないようである。これらの変化は喜界島北部方言と喜界島中南部方言にそれぞれ独立に生じたとは考えにくい。それは偶然性があまりにも高いからである。このために、中本 (1981b) 等の分類が正しいとすれば、これらの変化はどちらか一方の方言群で生じて、そこから全島を覆うように広がったとせざるを得ないであろう。しかし、喜界島には30の集落があり、30の方言があるから、変化前の語形は島のどこかに残っていてもいいようなものである。だが、管見の限りでは *カーズ「顎」、*クニブ「みかん」、*アシラ「下駄」、*ツブル「頭蓋骨」の例は島のどこからも報告されていない。これらの変化が喜界島祖語の段階でおこったとすれば、変化前の形の欠如は説明される。

本稿では、喜界島の諸方言が一つのまとまった方言群をなすことを論じたが、この方言群と奄美方言の他の方言との関係を特定するにはまだ至っていない。下駄が借用物でないとすれば、喜界島祖語は笠利祖語と姉妹語関係にある可能性が示唆されるが、より詳細な比較研究が必要で、そのために喜界島方

⁷ 笠利祖語では、「太陽」は *tīdan で、語末に改新的な -n が付加されている(上野 1996a: 158 参照)。喜界島祖語では「太陽」は *tīda として再建できるから、改新形を継承しない喜界島方言は笠利方言の娘言語でないことになる。

言、笠利町方言、ならびに奄美地方のその他の各方言のより充実した語彙と文法の資料の蒐集が俟たれる。

参考文献

- 岩倉市郎 1977[1941].『喜界島方言集』東京：国書刊行会.
- 上野善道 1977.「徳之島浅間方言のアクセント (1)」岩手国語学会論集刊行会 (編)『小松代融一教授退職・嶋稔教授退官記念国語学論集』188-220(1-33).
- 上野善道 1992.「喜界島方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』21: 41-160.
- 上野善道 1996a.「奄美大島笠利町諸方言の名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』24: 149-261.
- 上野善道 1996b.「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』15: 3-68.
- 上野善道 2005a.「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(1)」『琉球の方言』29: 1-40.
- 上野善道 2005b.「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(2)」『アジア・アフリカ文法研究』33: 155-204.
- 上野善道 2006.「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(3)」『琉球の方言』30: 1-49.
- 岡村隆博・沢木幹栄・中島由美・福嶋秩子・菊池聡 2006.『徳之島方言二千文辞典』信州大学人文学部.
- 長田須磨・須山名保子 1977.『奄美方言分類辞典 上巻』東京：笠間書院.
- かごしま地域文化創造事業奄美地区実行委員会 (編) 2010.『島唄から学ぶ奄美のことば』.
- 狩俣繁久 1996.「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム(下)」『日本東洋文化論集』2: 1-57.
- 狩俣繁久 1999.「音声の面からみた琉球諸方言」『ことばの科学』9: 13-85. 東京：むぎ書房.
- 狩俣繁久 2003.『奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙』「環太平洋の言語」成果報告書 A4-014.
- 狩俣繁久・上村幸雄 (編) 2003.『石崎公曹の奄美のことわざ』「環太平洋の言語」成果報告書 A4-016.
- 菊 千代・高橋俊三 2005.『与論方言辞典』武蔵野書院.
- 甲 東哲 (編) 1987.『島のことば』鹿児島：三笠出版.
- 木部暢子 2004.「奄美の方言」『奄美ニューズレター』11: 8-19.
- 崎村弘文 2006.『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』東京：明治書院.
- 寺師忠夫 1958.『奄美方言の研究 第Ⅲ編 語い』私家版.
- 徳富重成 (編) 1975.『徳之島尾母方言集 民俗・歴史の資料付(一集)』私家版.
- 仲宗根政善 1961.「琉球方言概説」東条操 (監)『方言学講座 第四巻 九州・琉球方言』20-43. 東京：東京堂.
- 中本正智 1976.「語彙」『琉球の方言 奄美大島宇検村湯湾方言』11-73. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
- 中本正智 1978.「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言 4 奄美喜界島志戸桶』1-63. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
- 中本正智 1979.「徳之島井之川方言の語彙」『琉球の方言 5 奄美徳之島井之川』7-67. 東京：法政大学沖縄文化研究所.

- 中本正智 1981a. 「鳥島方言の語彙」『琉球の方言 6 久米島鳥島』 7-50. 東京：法政大学沖縄文化研究所.
- 中本正智 1981b. 『図説琉球語辞典』 東京：力富書房金鶏社.
- 日本放送協会 (編) 1972. 『全国方言資料 第 10 卷 琉球編 I』 東京：日本放送出版協会.
- 服部四郎 1959[1932] 「「琉球語」と「国語」との音韻法則」『日本語の系統』 東京：岩波書店.
- 平山輝男 (編著) 1986. 『奄美方言基礎語彙の研究』 東京：角川書店.
- 外間守善 1977. 「沖縄の言語とその歴史」大野 晋・柴田 武 (編) 『岩波講座 日本語 11 方言』 181-233. 東京：岩波書店.
- 外間守善 2000. 『沖縄の言葉と歴史』 東京：中公文庫.
- 琉大方言研究クラブ 1977. 「鹿児島県奄美大島竜郷町円方言の音韻体系」『琉球方言』 14: 7-43.
- 琉球方言研究クラブ (編) 2003. 『琉大方言第 18 号 SANI 奄美大島笠利町佐仁方言』
- ローレンス・ウェイン 2006. 「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』 100: 101-118.
- Serafim, Leon A. 1984. *Shodon: The Prehistory of a Northern Ryukyuan Dialect of Japanese*. Yale University PhD dissertation.